恋愛へのイメージに関連する要因

Ａ６３１１３　栗林邦治

１　研究史

「恋愛イメージ尺度の作成とその検証（金政 2002）」において、現在の異性関係がより親密であればあるほど恋愛に対してよりポジティブなイメージを持っていることがわかった。また、「恋愛経験・恋人の有無による恋愛観・一体感・信頼感の変動一大学生を対象として（天谷 2007）」では、恋愛経験の有無・現在の恋人の有無によって「恋愛観尺度（天谷 2005）」においてエロス得点に差が出ることがわかった。しかしこれらの研究において、本人が恋愛を望むか否か、つまり意思の差による研究は行われていない。私は、この意志の差によって恋愛観にどのような差が生まれるのかに興味を持った。

また、対人的な問題もあるのか、果てまた恋愛に対して自分に自信が無いのか。つまり自己否定の面もあるのではないのかと考え、調査を行った。

２　目的

今回の調査において、「恋愛経験の有無」・「恋愛を望む意思の有無」に注目し、恋愛観にどのような差が出るかを検討する。また、自己嫌悪（自己否定的側面）においてもどのような差が出るのかを検討する。

仮説１　恋愛経験の有無によって恋愛イメージ・自己嫌悪に差がある。

仮説２　恋愛を望む意思の有無によって恋愛イメージ・自己嫌悪に差がある。

仮説３　恋愛経験の有無別に、恋愛を望む意思の有無で分けて見ると恋愛イメージ・自己嫌悪に差がある。

３　方法

実施日　　2009 年　12 月 18 日　4 時限（14：40～16：10）

被験者　　淑徳大学（千葉キャンパス）大学生。　男性 48 名　女性 66 名　有効回答 114

調査方法　質問紙によるアンケート調査を配布。

配布方法　4 時限開始時にアンケート調査紙を配布。4 時限終了時に回収。

使用尺度　恋愛イメージ尺度「恋愛イメージ尺度の作成とその検証（金政 2002）」

自己嫌悪尺度「青年期における対人恐怖心性と自己嫌悪感との関連（水間 1996）」

項目数

恋愛イメージ尺度

大切「恋愛は私の心の支えだと思う。」等、大切・必要なイメージ（6）

刹那　「恋愛は遊びだと思う。」等、刹那的イメージ（6）

相互　「恋愛はお互いを理解しあうことだと思う。」等、相互関係のイメージ（4）

独占　「恋愛をすると相手を独占したくなると思う。」等、独占的イメージ（3）

衝動　「恋愛をしていると周りが見えなくなってしまう。」等、衝動的・盲目的イメージ（3）

献身　「恋愛とは相手のためなら何でも出来ることである。」等、献身的イメー（3）

計 25 項目

自己嫌悪尺度　「自分に嫌気がさす事がある」等、自己嫌悪のイメージ　21 項目

計 46 項目

４　結果

仮説１　恋愛経験の有無によって恋愛イメージ・自己嫌悪に差がある。

仮説１を検証する。各得点の差を、ｔ検定によって検討したところ、自己嫌悪において有意差が認められた（$t(111)0.59=,p<0.005$）。経験ありの平均得点は 3.36、経験なしの平均得点は 2.74 である。すなわち、恋愛経験のありの方が自己嫌悪が高いといえ、仮説１は一部支持された。

仮説２　恋愛を望む意思の有無によって恋愛イメージ・自己嫌悪に差がある。

仮説２を検証する。各得点の差をｔ検定によって検討したところ、大切において有意差が認められた（t(51)=4.17,p<0.005）。恋愛を望む意思がある方の平均得点は 4.79、恋愛を望む意思がない方の平均得点は 2.91 である。すなわち、恋愛を望む意思がある方が大切得点が高いといえ、恋愛イメージが異なるため、仮説２は一部支持された。

仮説３　恋愛経験の有無別に、恋愛を望む意思の有無で分けて見ると恋愛イメージ・自己嫌悪に差がある。

仮説３を検証する。

表１は、恋愛経験があり、恋愛を望む意思の有無別による各得点の平均得点である。各得点の平均の差をｔ検定によって検討したところ、大切と刹那で有意差が認められた。それぞれ、大切では（t(35)=2.72,p<0.05）。刹那では（t(34)=-0.25,p<0.05）である。

表２は、恋愛経験がなく、恋愛を望む意思の有無別による各得点の平均得点である。各得点の平均の差をｔ検定によって検討したところ、大切と衝動で有意差が認められた。それぞれ、大切では（t(14)=3.28,p<0.01）。衝動では（t(14)=2.25,p<0.05）である。

表１　恋愛経験有りで、恋愛を望む意思の有無別の格得点の平均

		恋愛イメージ尺度					自己嫌悪尺度
	人数	大切*	刹那*	独占	衝動	献身	自己嫌悪
意思あり	34	4.82	3.39	3.42	4.56	4.99	3.45
意思なし	3	3.00	4.33	4.11	4.22	4.55	3.79

＊；p＜0.05　**p＜0.01　***p＜0.001

表２　恋愛経験無しで、恋愛を望む意思の有無別の格得点の平均

		恋愛イメージ尺度					自己嫌悪尺度
	人数	大切**	刹那	独占	衝動*	献身	自己嫌悪
意思あり	13	4.70	3.76	3.20	4.41	4.80	2.89
意思なし	3	2.83	2.66	2.88	3.00	3.11	1.82

*；p＜0.05　**p＜0.01　***p＜0.001

５　考察

仮説１において、恋愛イメージに差がないものの、恋愛経験がある方が自己嫌悪が高く、恋愛経験がない方が自己嫌悪が低い。これは、実際に恋愛経験を体験し、親密な相手との関係の難しさなどを経験したためと考えられる。また、自己嫌悪と対人恐怖との関係も認められており（服部 2003）、恋愛関係によってもたらされた、恋人との不安定な部分が影響したためだと結論付けた。

仮説２、３において、恋愛を望む意思を持つ者が、持たない者と比べ恋愛を大切だと感じていることがわかった。さらに、恋愛経験があり恋愛を望む意思を持つ者は、持たない者と比べ恋愛を大切に感じ、また刹那的（否定的）に感じてはいないことがわかった。また、恋愛経験がなく恋愛を望む意思がある者は、持たない者と比べ恋愛を大切に感じ、衝動的なものであると感じていることがわかった。これは、恋愛を経験して恋愛を望む意思を持たない者は、恋愛によって受けた傷によって否定的になったと考えることができる。恋愛経験がなく恋愛を望む者は、恋愛を衝動的な、「恋に落ちる」ものであり、恋愛イメージを肯定的な、どこか焦がれるように感じていると考えられる。そしてこの二つの共通項は、恋愛を望む意思の有無によって恋愛を大切に感じていることに差があることである。つまり、恋愛を望む意思の有無によって、恋愛を大切に感じるか、感じないかに分かれている。

引用文献

自己嫌悪尺度の作成　水間令子 1996

青年期における対人恐怖心性と自己嫌悪感との関連　服部 浩三　2003

恋愛イメージ尺度の作成とその検証　金政祐司 2002

恋愛経験・恋人の有無による恋愛観・一体感・信頼感の変動―大学生を対象として　天谷祐子 2007